

美術大学における仮設表現空間による教育プログラム研究

An Experimental Program: A Study of the Program at a Temporary Gallery in an Art University

宮田道明
Michiaki Miyata

はじめに

芸術大学・美術大学と言われる大学において、中でも、美術ジャンルで学ぶことは、当然アートという世界での実際であり、芸術とは何かと言うことを学ぶ場である。ここでは一般的に言われる美術表現について述べるだけでなく、この芸大・美大における教育体系の一つについて述べようと思う。特に、私が専門とする彫刻表現教育の現場から述べようと思う。この「美術大学における仮設表現空間による教育プログラム研究」もこうした中から生まれている。

この仮設による表現空間研究の実施は、現在の彫刻コース、カリキュラムの中にある「空間環境計画」という授業から2002年度よりスタートし、2003年度より各教員の研究を大学として推奨していく特別研究という形に助成され、2005年度より開設されたプロジェクトと言われる、大学として各教員の研究行為をより強力にサポートするシステムに準じた形となっている。表題にある仮設という言葉が示す空間は、全く学生の手作りによる一時的な発表空間であり、そこでは学生による企画である個展、グループ展が開催され、今社会で活躍している新鋭の作家の個展などを具現している。また他芸術大学との展覧会を通じた交流の場ともなっている。

この仮設ギャラリーも芸術大学という学内で展開されている点から言って、当然、教育の一環であり、カリキュラムという大きな時間的流れの中にある。また、仮設という言葉の持つ時間的性格の流れから言っても、4月という年度替わりの時を中心とした、約1年間という限られた時間の中で実施された複数回の連続であるということ、まづ述べておかなければならない。

1 現在の本学彫刻コースカリキュラムでは、大きく分けて1・2年次が基礎、3・4年次が応用であり、展開と考えている。この基礎段階教育では、まず基本として具象彫刻の時間があり、粘土という自由に加工できる素材により、自然の持つ美意識の学習からスタートし、彫刻としての歴史性、文化性についてその基礎を学ぶ。同時に、彫刻表現に必要な木・石・金属等の実在素材についての加工技法も学ぶ。3・4年次ではその応用・展開として、表現という領域に踏み込んでいく。3年次では比較的学内と言うことを中心に自己と向き合う点を基軸としているが、4年次ではより高度な社会性をも含んだ位置づけが必要となり、卒業制作としてまとめる形をとっている。これらのカリキュラムの流れは、大旨どの大学でも



2002年、授業にて行われたsculpture galleryの廃材を使用して、作られた学生有志5名による自主ギャラリー。



その別アングル写真、校舎ピロティーにあり、屋根はなく壁のみのギャラリー。



2002年、本学非常勤講師、渡辺英司氏による temporary project room外観。



temporary project room完成オープニングレセプション。



石彫道具の保管庫であったコンテナを発表空間として改装、その作業風景。



完成直後のコンテナギャラリー。コンテナ扉内側に偶然書かれていたU8の二文字がギャラリー名「U8プロジェクト」呼称のきっかけとなった。



2004年、永田圭氏による個展「オレンジ」(学生企画)



2005年本学非常勤講師である古池大介氏による個展と、同時に開催されたレクチャー風景。



2003年授業と特別研究助成との重なりにより「WHITE HOLE」が作られた。大規模スペースとなったと同時に、広範囲の企画の実現に繋がった。

ほぼおなじ事であろうと受け止めている。だがここで問題としていることは、基本的にこうした芸大・美大がアートを教育しているという点である。知識の積み上げの上に成立する問題ばかりではなく、各個の出生にまでさかのぼらなければならない、自己表現という曖昧模糊とした領域を抱えているところである。芸大・美大の教育の本論はこうしたところにあるのではないかと考えている。こうした幅広い教育に置いて、カリキュラムの中だけでそれを実現しようとするれば、当然困難がともなう。これは教育の現場として無責任に述べているわけではなく、限られた時間での教育には、自ずと限界もあるということを言っている。

多くの芸大・美大においてカリキュラム上、明確な分離は困難としても、基礎部分があり、応用・展開の部分があることはそんなに違いはないことと思う。基礎部分があり応用・展開という部分があるとすれば、基礎部分に当たるところは、大旨が知識の学習と言うことであり、応用・展開という部分には自己表現という抽象的な教育がともなうと言うことである。芸大・美大で学ぶ中心が、このアートという自己表現の実際を学ぶ場であるとするのなら、その教育体系は十分に考えられなければならない。その教授方法は多岐にわたると考えている。また、その具体的に大切な時間が、3年次であろうとも考えている。

30年程前となるが、私が学んだ環境では、この3年次教育では、素材を中心としたものであったと思う。違う素材を選択し2作品以上の制作をしなければと言うことであったと記憶している。当然、授業の中では制作という行為を通して、各先生方とのディスカッションが必要であり、その中で学ぶことを要求されたわけだが、個人的にはこうした授業を中心としたことだけではなかったように記憶している。画廊であったり、友人であったり、本などを通して、多くはその時に流れていた美術事情でもあったと記憶している。

現在、彫刻表現領域における素材は多岐にわたる。木であるとか石であるというような、限られた表現形式の中にあった時代とは変化がある。ここでは前述のような素材選択による制作を通じた教育が間違いであるなどと述べているわけではない。だが、表現するという行為そのものを切り取った、真正面切った教育方法が語られても間違いではなかろうと思っている。

2 そもそも仮設とはいったいどんなことなのであろう。ある辞書によれば、①ある期間だけ臨時に設置すること。②想像によって物・場面などを作り出してみること、とある。本研究における仮設空間も二つの側面を持っている。一つは、大学の施設という言葉に対して、施設ではない空間であり、約一年間という一過性、その一時的な寛容さの中で許された物理

的な実験空間としての側面。もう一つは、そのことでしか勝ち得ることが出来ないと思われる、自由を勝ち得るといった精神的な実験空間としての側面である。

例えば、美術館であるとか、画廊では、釘一本打つことにも条件がある、程度は違って既設の建築物である以上、当然のことである。だが、コンクリートで作られたビルも100年もすれば解体の憂き目にあう。1000年、2000年の時も、宇宙という時間から見ればほんの一瞬に過ぎない。この仮設という事を時間という視点だけで括るのは間違いであろうと思う。また、地震、風水害等により、やむなく強いられる仮設住宅生活と、いわゆるホームレスと言われる人達のブルーシート、段ボールを使った小屋と、空き地に突然作られるサーカスのテント小屋とは違うのである。個人的な意見だが、サーカスのテント小屋、ブルーシートという言葉にある憧れを持ってしまうのは私だけであろうか、本研究もスタート時にはそんな位置づけが動機であった。この仮設空間も現在のところ芸術大学という敷地内で行われている。これは表現を追求する現場にあり、保証された空間の中で行っていると言うことであって、確かに社会性という点からすれば欠ける部分もある。外側を守られた中で、身勝手に自由な空間が本研究の現在の姿である。だが、これも逆に言えば、このことこそが究極に近い自由、夢見る権利だけを切り離れた空間をつくっているとも言えるのかも知れないのである。ピュアで純粋な出来事の追求、これも本来大学という機関が受け持つ一つの責任と言える。

3 抽象的な言葉だが「入りの形」と「出口の形」という言葉がある。大学教育の現場から言えば「入りの形」とは、一つには入学試験のことを言い、入学時の学生個々であり、その彼等全体の姿のことを言う。「出口の形」とは進路であり、卒業時におけるいわゆる人間力と言われるような、知識をそなえ、豊かな生きる力をそなえた人間像であるその全体の姿のことを言う。改めて言うまでもなく、大学教育というのはこの間の、4年間の教育と言うことになる。「入りの形」の入試という点から言えば、18才人口減により、何年か前と比較すれば、そのハードルは低くなってきている。具体的には、入試におけるデッサン力の低下がある。「出口の形」という視点は、この4年間における大学としての教育成果を客観的に見つめてみようと言う視点でもあろう。これらのことから見えてくることも多くある。中でも注意しなければならないことが、大学入学以前の中学、高校教育であり、彼等の育ってきた環境の変化と大学教育が、どう関連しているかと言うことであろう。

彫刻表現を学ぶ上で重要なことにスケール感と言うことがある。前述のように現在の彫刻コース、3年次カリキュラムに科目名「空間環境計画」



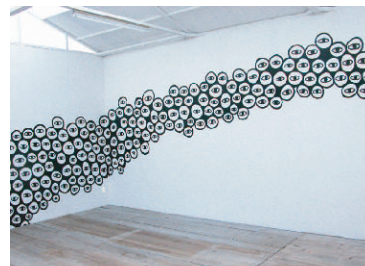
2004年、本学・愛知県立芸術大学・名古屋芸術大学3大学の「交流展」、そのオープニングパーティー風景。



2003年、仮設空間「TPR」制作中風景。多くの空間がこのパネルによる壁面、屋根は部分ユニットで作られ、載せるという工法で建てられている。



「TPR」完成記念イベントとして開催された、愛知県立芸術大学、音楽学部学生有志を中心とした自主グループによる、サウンドパフォーマンス。



この空間の製作者の一人である3年次学生（鈴木優君）の、こけら落としでもある個展。壁に直接ペインティング。



日常であるキャンパスライフ、これは共有する事であり、確かな自己存在とは少しニュアンスが違う。自分達の汗で作られた異空間は学内における学生の確かな自己存在の確信にも繋がる。



「future lounge」の外観、石材置き場にて。後方にあるのが石影場であり、「TPR」の背面、建設には時間が必要であり、建設と解体が重なることもある。



2004年「future lounge」完成の時。彫刻コース3年次学生と協力者、共に喜びの瞬間でもある。



2005年7月、石材置き場に完成した「Art Grill」外観。これは授業として行われたものだが、同時にこの年9月より別な次元である大学としてのプロジェクト、コース、学年を越えた集団によるプロジェクト「COLUMBIA」もスタートしている。



「Art Grill」入り口。この前には差し掛けがあり小空間がある。空間そのものに対するデザイン性という事が浮き彫りになった出来事でもあった。

がある。木・石・金属等における抽象的な制作も、イメージの具現という点から言えばリアルサイズといえる。だが、人間というスケールを一つの基準とした時に、はたしてリアルサイズといえるのであろうか。実存という質量の問題も彫刻表現では重要なファクターなのである。ここでは人体等身大制作での学習がそのことを明確に指していると思う。また「空間環境計画」の中に計画とあるが、計画とは実体験という体現が根拠となるべきとも考えている。

入学時の彼等の多くは、例えば金槌を使って釘を打つことすら経験に乏しい、鋸で材木を直角に切ると言うことなど望めないのである。釘抜きという道具があるが、これはテコの原理を利用して釘を引き抜く物だが、中には釘の頭に引っ掛け、引っ張る学生もいる。勿論、人間というスケールを前提とした物作りの経験は皆無に等しい。

この仮設の空間はリアルサイズであり、実際の空間である。その白い四角い空間は単純な形ではあるが、完成度が求められなければならない。表現の為の空間という性格上、その内側では完全に異空間でなければならず、上質な空間作りを指導している。壁面の仕上がりレベルが、開催される展覧会の緊張感と直結しているということは、彼等も理解している。繰り返し述べるが、この空間は全く学生の手作りによるもので、このプロセスを通し、彼等は個々に数百本のビスを打ち、数百回角材を切り、塗装の技法を知るのである。結果、一つの空間が完成する頃には、実際スケールの加工力は格段に違っているのである。彼等にとって、ここに「出口の形」よりの視点である確かな物づくりに一つの基準が生まれ、一つの確信が生まれることになると考えている。この確信という言葉をもどだけ多く与えることが出来るかが現在の大学教育において重要なことであろうとも考えている。また、この空間は複数の学生による共同作業である。完成という言葉が示す一つの共通した喜びの経験、その達成感の経験は、今日の教育現場において求められる、学生自身によるアクティビティへの援助となり、集団づくり、社会生活における協調性の必然を、学生自身が体験することによって学べる実践例と考えている。

4 本学にも「Dギャラリー」「スペースD」という二つの表現、発表の為の空間がある。そこでは学務課が中心となり、各コースによる展覧会であるとか、学生のグループ展、個展が行われている。近年ではそのための委員会も立ち上げられ企画・運営されているが、学内の空間であるという性格上、まだ多くの時間がコース展、グループ展と言った学内事情に終わっているように思える。これも教育の現場という視点から言えば必要であり、これを否定しているわけではない。ただ、問題なのは、例えば、キュレーターというような個人の専門性に基づいた強烈な個性というよう

な、ある可能性まで求めた形までは至っていないのではないかとということである。こうした形が芸術大学の学内に必要かどうかは、今後を待たなければならぬが、社会的に産学連携が叫ばれる中、こうした議論も必要ではないかと考えている。また、大学病院というあり方では、医学部学生が学ぶという空間と、病院という実際の空間が同居しており、学ぶという行為と、医療という行為である社会性が直結しており、相乗作用をもたらしている。では、芸術大学、中でも美術のジャンルではどうであったのか、近年では各大学がそれなりの視点は持っているものの、学ぶと言うことと実際は、切り分けて考えられて来たのではなかろうか。美術ジャンルでの産学連携ということ言えば、美術館等における教員の社会的活動、また、美術館、ギャラリー等での発表というような出前的な関係はあったとしても、芸術大学としての役割、例えば、美術表現における最先端と一般との橋渡的存在、それを学内という場に置いて抱え込むような形も一つではないかと考えている。様々な形はあるが、大学学内であるからこそ、美術館でも画廊でも、オルタナティブなスペースでも出来ないことの実現を考えても良からうと思う。

本研究では企画・運営という部分を学生に任せている。具体的には、個展、グループ展等々の企画であり、その広報活動であるDM、チラシ、ポスター、ネット上での展開などの運営である。学生にとって「気になる作家」の展覧会、そのレクチャーに近い出来事を尊重している。結果、彼等にとって比較的年齢の近い作家となり、彼等の視点で「今」社会で活躍している憧れの人との出会いであり、その作品の展覧会となっている。この部分にもこの仮設空間の展開においては重要な意味がある。我々と彼等、学生とは基本的に年齢が違うのである。それは背景に微妙なズレがあることを意味している。学ぶというポジションでの不確かな位置づけだが、見つめようとする強烈なエネルギーを持った彼等の、「今」と共振しながら展開するこの仮設空間は、この世代の今に対する一つの「砦」であり「つづて」なのかも知れない。彼等が今後の美術界と関わっていくことも確かなことなのである。こうした作家招聘に近い形の展覧会の必要性は、この空間が大学という空間にあるという性格上、学ぶ者が学ぶ者に発表すると言う、いわゆる当事者間における甘えの構図を防ぐことにあるが、これはまた、表現という言葉の必然「見られる」という視点の空間的緊張保持には重要な意味を持つということであり、同時に、社会的必然性を自然に引き込む力にもつながっている。

この仮設空間には、「見る」「見られる」という関係と、もう一つの視点がある。「見られない」という視点である。アトリエの横にあるその空間は、展覧会を開催していない時間では、個人的シュミレーション、実験の場ともなる。場における、また場をともなった空間表現の学習には、必要



九Gallery建設風景。九とはこの仮設空間を始めて九つ目を意味してもいる。後方に見えるのが「Art Grill」この「九Gallery」完成直後に解体。



「九Gallery」における石田達郎氏によるパフォーマンス、「受験勉強の夜 こんな夜に限って」



マリアン・タッカーマンさん(イングランド)による「九Gallery」外壁での作品制作。



2007年、「空間環境計画」石彫場における彫刻3年次学生の仮設ギャラリー「house bee」、左サイドのコンテナがU8ギャラリー。



2005年本学プロジェクト助成を受け出来上がった「COLUMBIA」コース・学年を越え、仮設ギャラリーということに賛同した学生の手によるギャラリー。学内空き地に建設。



「COLUMBIA」内部。プロジェクト参加者によるグループ展WORK IN COLUMBIA「植物の惑星」。



プロジェクト企画による鈴木健二氏による個展、デモンストレーション風景。手前にある舞台にも似た空間がまた違う可能性を持ち合わせていた。



2006年、「air's box」外観。プロジェクト参加者によるグループ展「空気の箱」展。



「air's box」における竹田尚史、吉田知古、学生 伊藤風子、奥村梨沙、「光線『BEAM』」展。



「air's box」における「Lovers identity」展。新田玲子、伊藤風子、奥村梨沙、木場仁美、柴田さゆり、中島弘恵、細川貴恵。学生7名によるグループ展制作風景。

不可欠な空間とも言える。彫刻表現、立体・空間表現での場という言葉は広義な意味を持つが、相変わらずホワイトキューブという存在も重要な意味を持つと考えている。なお、この仮設空間では名称もない空間も行われ、作品を「つくること」、そのこと自体を表現してみようとする実験的空間の存在もあった。だが、これは後にある仮設の年表にも記載されていない。

まとめ

本研究も授業を含むと、スタートさせて約6年となる。この6年という期間にも、変化がある。本学においても次年度より総合造形コースという名称が、先端表現コースという名称に変わり、総合造形という活字、性格は残るものの、代表的な事として、その中にマンガ、映像/アニメーションというクラスが開設される。またアートプロデュースというコースも立ち上がる。これらの変化は現在の美術界の動向から言っても当然と考えており、今後に期待している。先端という言葉だが、従来の絵画、彫刻の世界にも当然先端はある。ここで先端という言葉が従来の世界と重なるわけだが、これも、どちらかが不要と言うことではないと思っている。逆に、先端という活字の登場が、従来の絵画、彫刻の立ち位置を明快にしたのかも知れない。

言うまでもなく教育というものは難しいもので、完全にコントロールしようとする教育は不可能に近く、逆に、意識されたある程度の放任も重要なことであろうと考えている。彼等はカリキュラム上にあり、美術事情である「今」という大きな流れの中にもいる。この仮設と言うことの真の目的は、この周辺にあるのかも知れない。カリキュラムというシステムと、当たり前と放置されがちな彼等を支えている「今」という時代の潮流、その不可視に近い潮流の導入である。そのことを意識された教育に導入しようとする行為。この仮設空間の意味を問われれば、それを試験的に具現した出来事ということになる。完全という完成形、いわゆる安定、静止した事など何処にもなく、行為、流れ、など、いわゆる動的な言葉「動き」の中に、存在の必然があると考えている。この仮設空間もこうした「動き」という言葉の中にある。静止しようとするカリキュラム、その上に重なる動的な存在。仮設という言葉は一過性を意味し、出来事を意味している。それは終焉と言うことをも意味する。だが、ここで改めて登場するのが、学生個々の存在である。この個はそれぞれ今に生きており、教育の現場はそこにいる。静止しようとする時間と生きているという時間の整合性をどう求めていくかが、今後の仮設空間という言葉なのかも知れない。

